

医師の義務と資格にかんする講義（承前）

Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician (1770, 2nd 1772)¹

ジョン・グレゴリー
(John Gregory)
(松家次朗訳)

第2講義

[医師に特有の礼儀と配慮]

さて次に医師に特有の礼儀作法(decorums)や気配り・配慮(attentions)と、その職業の威厳(dignity)を最も効果的に支えることに役立つものについて若干の所見を述べることにしよう。

礼儀正しさ(decorum)、良識(decency)、礼節(propriety)は、その適用において非常にあいまいな言葉である。それは、それらの言葉に付帯する観念が、自然やコモンセンスに基礎を持つ場合もあれば、またある場合には特定の諸民族における気まぐれ、一時的な流行、慣習に基礎を持つという理由による。最初の場合には、それらに対する義務感是不変、すなわち、あらゆる時代、あらゆる民族において同一である。後の場合には、それは不安定で、拘束力は前の場合よりは弱い。必要な場合、私はこの区別をはっきりさせるようにする。

* 2012年11月13日受理。

[礼儀作法や気配り・配慮に対する責務はどのようにして生じるのか]

私はすでに、医師が患者に負っている主要な義務、医師が患者の気分や健康状態に留意することの正当性、患者の安全と両立するわがままのすべてを彼らに認めることの正当性について注意した。

[新しい治療法の採用に関する医師の義務]

時に患者自身が、時に彼の友人の一人が、その医師に対して彼らが患者に役立つかもしれないと信じる治療法を提案することがあるだろう。彼らの提案は良き提案である場合があるし、またそれは非常に有能な医師に対してさえ、おそらくそれまでは彼の心に思い浮かばなかったであろうものさえも示唆する場合がある。それゆえそれを採用するのが彼の義務であるのは疑えない。しかし、同業者の中には、その職業の威厳に対する敬意を口実に、しかし実際にはさもあり、利己的な目論見から、こういう仕方で提案された治療法を、そのメリットを考慮せずに、すべて拒否する人たちがいる。しかし、このような振舞いは決して擁護できない。すべての人には、自分の命もしくは自分の健康が関係している限り発言する権利があり、またすべての人には、彼の友人の命を救うかもしれないと思われることを示唆することが許される。彼らにとって相応しいのは、礼儀正しくその医師の判断と異なることを持ち出すことであり、医師にとって相応しいのは、彼らが言わんとすることを注意深く聞くことであり、誠意をもってそれを吟味することである。もし彼が実際に賛同するのであれば、それを率直に認め、それに応じた行動をすべきである。もし彼が同意しないのであれば、その不同意を、その不同意が根拠のある確信に由来し、憤懣や強情からのものではないことを示すような仕方ではっきりと述べるべきである。もし患者が不適切あるいは危険な薬を試そうと心に決めているならば、医師は彼の決断を拒否すべきである。しかし、彼の忠告に従わないからといってその不満を述べる権利は医師にはない。

[患者と彼の関係者に彼の危機的状況を知らせる際の義務]

医師は、自分の患者たちの実際の状況が危険である場合、その状況を患者たちに話そうとする時途方に暮れることがよくある。このような場合には時には真実からの逸脱も正当化されるし、必要でもある。ある人が重病であるが、それにもかかわらず、彼にその危険な状態が伝えられなければ、回復する場合がよく起こる。他方で、ある人が危険な病気に襲われ、しかし、公私にわたる諸事万端の処理を済ませていず、しかも、おそらくは彼の家族の将来の幸福が彼のその処理に依存するかもしれないということが時に生じる。こういった場合や他のこれに類する場合には、細心の注意と洗練された態度をもって、患者に彼の実際の危険をそれとなく伝え、このような必要な義務に取り掛かるよう彼に強く勧めさえすることが、医師にとってそうあるべき態度である場合がある。しかし、あらゆる場合において、患者の実際の状況を患者の親族から決して隠さないというのが医師の義務である。まさに正義がこれを要求するのである。もしも親族がさらなる援助を必要と考えるのであれば、そのことが彼らにその援助を要求する機会を与えるからである。思いやりのある、優しい心根を持った人にとって、これは、この職業におけるもっとも同意しがたい義務の一つである。しかし、それは絶対に必要なことである。それを行う仕方には、思慮深さと人間愛が等しく求められる。医師にこのような骨の折れる義務をより容易に受け入れさせるはずのものは、仮に患者が回復すれば、それは嬉しい誤算(joyful disappointment)を彼の友人たちに示すことになるだろうし、また、彼が死んだ場合でも、それはその衝撃をより穏やかなものにするという省察である。

[医師が患者の命に絶望するときの医師の振る舞い]

ここであなた方にある種の医師たちの習わしに対して勧告させてほしい。それは、患者の命が絶望的になった時、そして、患者にさらなる費えをさせるこ

とがもはや適切ではなくなった時に、患者を見捨てる医師たちのことである。病気の治療だけでなく、苦痛を緩和することや、それが避けられないときには死への道筋を平坦なものにすることもまた医師の務めである。医師としての彼の技量がそれ以上効果を発揮できなくなった場合でも、友人としての彼の存在と援助は、患者にとっても患者のもっとも近い家族にとっても望ましく有益である場合がある。患者を援助し、彼の霊的問題を処理させるために聖職者が呼ばれる時、医師がその場を去ることもまた適切なことではない。反対に、医師と聖職者が相互に理解し合い、ともに行動することが相応しく、適切なことなのである。病人が信頼を寄せている聖職者の、心からの信心と良き心の話は、時には、患者の心の苦しみや、彼の魂の動揺を和らげるのに、いかなる薬よりもはるかに大きな結果をもたらす場合がある。しかし、陰鬱で、思慮分別のない狂信者の場合には、患者に大きな苦しみを与えることもあるし、患者をおびえさせ、そうでなければ救われたかもしれない命を縮めることにもなりかねないだろう。

[医師たちの言い争いによって患者を苦しめないことは患者の利益である]

この職業に属する人々の間には、不幸な嫉妬や敵意がよくあって、それによって彼らの患者を苦しめることもある。しかしながら、何であれ、正義あるいは人間愛の心を持つ医師は、決して自分の患者を、患者には関係のない私的な言い争いの結果に巻き込むことはしないであろう。

[診察・治療の協議]

診察に当たっている医師たちは、彼らの個人的な敵意や互いに対する見解がどのようなものであれ、あらゆる偏向を排して、彼らのケアの下にある人々の救済に最も効果的に寄与することのみを考えるべきである。もし医師が、自らの手を胸に置いて、自らの心が証拠に基づく確信に、それがどこから来たもの

であっても、完全に開かれているということができないのであれば、彼は名誉のためにその診察を断るべきである。彼らが誠実な人たちであり、互いの道義心に対してともに信頼を抱いていれば、二人の医師が一緒に診察することから多くの利点が生じる。一方の医師には思い浮かばなかった治療法が他方の医師には思い浮かぶこともある。医師は、強力ではあるがしかし危険性を孕む、にもかかわらず、彼の患者の命がそれに依存するかもしれない治療薬を処方するために、決断あるいは、自ら自身の見解に対する信頼を必要とするときもある。このような場合、同業者の一致した見解は彼自身の見解を確固たるものにするだろう。しかし、相互の信頼がなく、見解がそれらに固有の利点に従ってではなく、それらの見解の出所である人物に従って考慮される場合には、あるいはもし、率直に述べられた所見が噂として広められ、世間の人に誤り伝えられると信ずる理由が存在し、そしてこの結果、医師の一人だけが彼の助言の結果に対して責任ありとされるのであれば、そのような場合には、医師たちによる診察は、病人の利益になるよりはむしろ害となるであろうし、そしてまた、彼らのお決まりの、そしてまさに最も好ましい結論は、ある種全く無害であるがしかし無意味な処方となる。

[医師の職業の利益に関する行為]

医師たちの言い争いが、世間に対する訴えで終わるときには、一般にそれらは相争う者たちを傷つける。しかし、より重要なことは、それらがその職業の信用を失墜させ、その職能団体そのものを嘲笑と軽蔑にさらすことである。私の見解では、医師が他の医師と相談するよう求められたとき、医師がそれを拒絶することを正当化しうるものは、以下の理由以外にない。彼が落ち着いた気持ちで行動することが出来ないことを、そしてまた彼の感情が彼の判断を損なうほどかき乱されていると自覚している場合には、彼はそれを拒絶することが許されるし、また拒絶すべきである。しかし、彼が相談しようとしている人物

が学位を取った大学とか、その人がどこかの学位をもっているかどうかといった事情が、その人物の拒絶を正当化することはありえない。医師の義務は、患者の命を救うために彼の能力において彼のできる、犯罪とはならないすべてのことをすることであり、あらゆるところから、そしてあらゆる人から、その人がどんなにいやしく軽蔑すべき人であっても、治療薬を採求することである。このようなことは、その職能団体の威厳と利益を犠牲にするものだといわれるかもしれない。しかし、私がここで語っているのは、ある職業組合の私的な規定（police）についてではないし、ある同業者組合のつまらない技術についてもない。私が論じているのは、その対象が人類の生命であり、健康であるという、教養ある紳士に相応しい職業（liberal profession）、すなわち、道義心をもち気高い生き方をする紳士たちによって遂行されるべき職業の義務についてなのである。その職業の威厳は、その職業の究極的な目的と両立せず、単に自尊心のみを増大させ、わずかな個々人の懷を満たすだけになりがちな手段によって決して維持することは出来ない。

[若い医師たちの年配の医師たちに対する態度]

若い医師たちには、年配の医師と話し合う際には、自らの行動の礼儀正しさに特に注意することが相応しい。年齢に対して当然支払われるべき尊敬のほか、これらの人々には、彼らのより長くてより広範囲に及ぶ経験から特別の敬意を得る権利が与えられている。確かに医学の前提や体系の変革は非常に速いので、年配の医師と若い医師とが彼らの職業の主題に関して同じ仕方で推理することは少ないほどである。もちろん彼らが本質的には同じ所見を表現するのに単に異なった言語を使用している場合には、その相違は事実というよりはむしろ見かけ上のものであることがときにはあるけれども。しかし、一般には、たいていの場合若い医師たちの注意をひきつける思弁は、彼らの医療行為にほとんどいかなる程度にも影響を及ぼさないことがよくある。それ故に、思弁は

その職務にとって大部分異質なもののなので、彼らは思弁を医療上の話し合いに持ち出すべきではない。若い医師たちは、年配の医師たちがそれによって教育され、彼らがしっかりと確立されたものと見なしている見解に対して、それらが時代遅れで論破されたものだとして軽蔑の念を表現する機会を軽い気持ちで利用するとき、彼らは思慮分別や礼儀の欠如を同じように示している。少し反省すれば、2、3年の間に、彼ら自身の最もお気に入りの理論が、それ以前の理論と同様に説得力に欠け、偽りのものと発見されることもあり得ないことではなことが彼等にもわかるだろう。そしてこのことはきっと彼らに、自らの青春のあの偶像が次世代の生意気な嘲笑によって攻撃されるのを自ら見るとき、彼ら自身がどれほど強く傷つくかを考えさせるだろう。そしてその時にはおそらく、彼らは彼らを守る根気も気概も持ち合わせない人生の時期に達しているであろう。² 年配の医師の見解に示されるべき尊敬と同じ尊敬は、彼らのお気に入りの著者たち、さらに言えば、医学においてその発展に貢献し、その名が、医術の連綿と続く時代において、その職業の最も賢明でもっとも学識の深いと崇敬されてきた著作家たちのすべてにも拡張されるべきである。若き医療の実践家たちにとって、彼らがその見解において他の人々と異なる場合、その相違を慎み深くかつ礼儀正しく表明するのは、賢明であると同時に適切でもある。一般に高く評価されてきた特質の彼らによる濫用は、真理への愛から流れ出る自由で気高い精神の現れというよりはむしろ横柄さとうぬぼれの現れである。確かに、感情と推論の内容のすべての中には、自由に対する燃えるような愛と、権威をなんとしても自分のものにしたいという切望とがあり、それは若い人たちにおいて自然でもあれば特有のものでもある。このような気高い精神は、甚だしく中身がなくつまらない、見栄えばかりの著者たちを、彼らがあざけりの対象にすると、あるいは、ずうずうしく横柄で尊大な著者たちの無礼さを激しく譴責するときに、最も適切に示される。しかし、ヒポクラテスやシデナム（Sydenham）やブールハーベ（Boerhaave）のような著者たちに付

いて語るときは、かれらは自らの職業における天才と優秀さに劣らず、その誠実さと謙虚さにおいても名高かったのだから、彼らの見解は自由に討議に付されるにもかかわらず、彼らの人格は礼儀正しさだけでなく、畏敬の念をもって取り扱われるべきである。³

〔医術（physic）、外科（surgery）、薬学（pharmacy）の間の相違〕

さまざまな時代に、特にフランスで約20年前に、医術と外科との境界について、そしてまた外科が医学（medicine）に対して本来従属的地位にあることについて、大きな論争が生じた。これは人類にとって有害な論争で、しかも、しばしば学者や教養ある紳士に相応しくない仕方で行われている。この機会を利用して私は、これに関する見解を述べておこうと思う。

ケルスス（Celsus）が私たちに伝えているように、大昔には医学は三つの分野に分かれていた。第一は、食事療法の規制に関するものである。第二は、治療の処方に関するもの、第三は、手術すなわち外科に関するものであった。最初の二つは、理論的にははっきり区別されるが、実践においては常に一体となっていた。最後のものはしばしば、これらとは別に行われてきている。大昔の医師たちは、手術を自ら行うことも時にあったが、それ以外の場合には、その目的のために保有していた奴隷たちによって行われた。現代人の間では、医術と外科という技はしばしば、同一人物によって区別せずに行われている。たとえば、ヒルダヌス（Hildanus）やセベリーヌス（Severinus）やバルトリン（Bartholine）や、卓越した才能と学識をもった他の多くの人たちがそうである。⁴ しかし、ヨーロッパの多くの部分では、昔も今も、外科は教養ある紳士に相応しい職業（liberal professions）の一つに算入されていず、外科医たちは不面目にも理髪師の組合（corporation）に分類されてきた。そのような場所では、この技は教養ある紳士に相応しい教育を受けたことのない最も低い階級の人々によってしばしば行われたに違いないと、私たちは無理なく推定で

きるだろう。現代における医術と外科の分離は最悪の結果を生み出している。医師と外科医は異なった社会集団を形成し、多くの場合互いに衝突する異なる利益を擁護していた。外科医たちは、すべての手術を行うことの排他的な特権を主張しただけでなく、同じようにたいいていの外的な病気の管理や、手術がしばしば必要と想定されるある種の内的な病気の管理も主張した。このような仕方では多くの病気の治療法が時に、無教育だけでなく無知の人々の指示に任されることになった。しかし、分別があり教養あるすべての観察者には、人間の体の病気はきわめて密接に関係していて、それらのいくつかについて完全に理解しながら、他のすべてに関してまったく無知であることなどありえないということが明らかだったに違いない。そしてまた、健康の状態と病気の状態の両方における解剖学や動物生理学（Animal oeconomy）の何らかの知識なしに、それらについてほとんど理解できないということも明らかだったに違いない。同時に、医療者は、そのような一般的な知識をよく理解していれば、相当に有利であるし、一つあるいは二つの特定の病気の研究に取り組むことによって、より容易に上達するということも認められるに違いない。ジステンパー [distemper 精神的肉体的な不調] は、内的なものだけでなく外的なものもすべて、医師の認識範囲に含まれる。そして、それらのいずれについても無知であることは、医師にとって不名誉の種である。そしてまた、内的な病気と外的な病気の間に正確な境界を設定し、その明確な区別を何らかの程度に役立つようにすること、もしくは実践的に適用できるようにすることは、出来ない。ある人が脚を折って、それに続いて熱と壊疽が起こったと想定しよう。そうすると次のような問題が生ずる。すなわち、その脚は直ちに切断されるべきか、あるいは、その壊疽の進行を止める目的で与えられたある種の薬の効果が知られるまで少し待つべきかという問題が生じる。この場合、症状、身体の状態、他の証拠からその延期が賢明なことかそうでないかを判断することがまさに医師の務めである。その手術そのものの出来栄はまた別の問題である。優れた医

師を作るのに必要な才能と教育は、優れた手術者を作るのに必要ではない。優れた手術者を作るのに特に必要なものは、着実に冷静な精神と優れた目と堅実な手である。これらの才能が有能な医師の才能と結びついていることはあるだろう。しかし、それらはまた有能な医師の才能から切り離されていることもあるだろう。もし仮に外科手術が全く純粹に手術者のみとなる人たちに限定されるのであれば、その技は、彼等よりもより複雑な職務に従い、医学のすべての分野を实践する人々よりも、そういった人たちによってより早く完成の域にもたらされるであろうと期待されるのも当然かもしれない。もし仮に薬剤師たち (apothecaries) が、薬を準備するという仕事のみに制限されれば、同様の利益が薬剤師の仕事に加わるであろう。しかし実際には、ヨーロッパのいくつかの地域で、外科医が正規の医師として行為しているところもあるし、他の地域では、薬剤師たちが医学教育もなくこの職務を行っているところもある。その行き着く結果は、多くの場所で、この職業の不面目の種である、身分の低い無教養の人々によって医術が実践されているということである。薬剤師の仕事に関して言えば、強く望まれることはいっぱいあるだろう。それを自らの務めとする人たちは医術という実践に何らかかわりを持つべきではないとか、医師たちは自ら自身の薬を調剤し、それらの費用を彼らの患者に請求すべきでないか、あるいはともかくそれを原価で請求すべきであるとかいったことである。私たちが、医療行為において処方単純化が、そしてこれはその実際の利益を理解するすべての人が熱烈に望んでいることだが、生じるのを目にすることを期待できるのはこれらの方法のいずれかしかない。そして、私たちが、医師たちを彼らの技の進歩に向かうようなものの以外のものに注意を向けさせないあの名誉ある独立の状態に医師たちが置かれているのを目にするのを期待できるのは、そのような取り決めから以外にない。しかしよく知られている事実は、ヨーロッパの多くの地域で、最良の資質を持ち、最良の教育を受ける医師たちは、彼らの成功のためにはしばしば、そのどちらをも敢えて求めない薬剤師に

依存せざるを得ないということであり、薬剤師に対する義務は、医学の名誉を心配する誰もが、義憤を以て反省せざるを得ないものによって報いられることがあまりに多すぎることである。

今まで私が述べてきたことから、私にその職業の特定の分野を非難する意図のないことは明らかである。そのすべての分野は、それが能力と誠実さを以て行使される場合には、尊敬すべきものである。私はただ誰の目にも明らかな真理を得ようとしているに過ぎない。異なる分野は別々の職能とされるべきか、あるいは、もしある人がすべての分野を職能としようとするのであれば、彼はそのすべてに対して正式に教育され、完全にそのすべての精通者となるべきなのである。私はここで序列の問題を調整しようとしているのでも、医学における称号に当然支払われるべき敬意を当て付けているのでもない。ドクターの称号は決して健全な思慮〔センス〕を授けることは出来ないので、称号だけでは決して尊敬を強要することは出来ない。また、それが無いからといって、実際の優れた価値に払われるべき尊敬と敬意がいかなる人からも奪われるべきではない。もし外科医もしくは薬剤師が医師の教育を受け、その知識を獲得しているのであれば、彼が称号を持っていようといまいと、彼は事実上医師なのであって、尊重されるべきであり、それ相応に扱われるべきである。大英帝国では外科は教養ある紳士に相応しい職業である。その多くの地域では、外科医もしくは薬剤師は、大抵の家族にとってかかりつけの医師であり、その教育と知識によって多くの場合彼らはその信頼によく値する。そして医師と呼ばれるのは、病状が容易でない場合、もしくは、危険が伴っている場合だけである。しかしながら、二つの職能の間には、注意すべきある種の限界が存在する。それらは、その国の慣習やそれらのいくつかの団体の決まりによって確立されている。しかし、誠実で偏見にとらわれない医師は、名目上の区別やある種の特権が、実際の価値において彼に匹敵する人以上に彼に与えるものを利用しようと決してしないであろうし、より優れた学識とより優れた能力とより洗練された

作法に由来する以外のものにいかなる優越をも感じないであろう。彼はうぬぼれや利己主義や気まぐれに基づくそのような区別を軽蔑するであろうし、科学と人類の利益が、彼の側での形式に対する堅苦しい固執によって決して損なわれないよう注意するであろう。

[服装について]

医師という身分に特有のエチケットの中で、服装におけるある種の形式性や、態度における特有の重々しさが強く強調されている。以前に述べたように、エチケットと礼節はそれらの基礎を自然やコンセンサスに持つ場合もあれば、たんに気まぐれや流行にしかない場合がある。このような見解は、現今の国民によって例証されるであろう。多くの職業において、服装の特有の形式性と仰々しさはいかなる流行にも関係せず極めて厳格である。例えば、裁判官と治安判事の場合がそうである。服装の様式、あるいは、外的な容姿において、彼らを畏敬や尊敬の対象にするものは何であれ、なくてはならないものであり、適切なものなのである。というのも、それらは人々の心に法に相応しい尊敬の念と恐れを印象付けるからである。そしてまた、治安判事という公職にもたらされるこのような尊敬の念には悪用の危険は全くない。医療という職業においては事情が全く異なる。医師が他の服装よりも好んである服装を身につけるという点に本来の妥当性など存在しない。彼の人としての価値に値するものとは無関係に、何らかの特有の敬意もしくは権威が医師の職業に付加される必要など必ずしもないからである。それどころか経験が示しているように、私たちの外的な形式尊重はしばしば、人類の弱点と信じやすさに付け込む器として使われてきたのであり、一般的に、それらはその職業のうちでもっとも無知で厚かましい人たちによって特に几帳面に固執されてきたものなのである。それらは本当の価値と良き才能をしばしば押しのけ、その職業の威厳を支えるどころか、しばしばその職業を嘲笑の対象にさせているのである。そうだとすれ

ば、医師が他と際立つ服装をすることに自然な本来の妥当性が存在しないのであれば、彼が居住する国の特定の流行に起因するものは別として、彼がそれを使用するいかなる義務もあるはずがない。しかしながら、次のことは一つの義務であり、そして、コモンセンスと思慮分別は、当然それを彼が尊敬すべきものとさせるのである。もしも、ある国の慣習もしくは先入観が、センス、知識、あるいは威厳という観念を服装のなんらかの様式に付着させているのであれば、思慮分別による様々な動機から、それに応じた服装をすることは医師の務めである。しかし、医師の能力がそのような基準で測定されず、また、他の人々の評価を落とすことなく彼らと同じような服装が可能な国では、私が思うに、もしそうすることを医師が欲するのであれば、彼にはこのような寛大さを利用する完全な自由があり、彼の職業の礼節と品位から逸脱しているとはみなされない。

医師が服装や作法において他と際立つ形式的で堅苦しい態度を取ることが非常に不適当である場合がある。私は単に不愉快な印象のことをほのめかしているのでもないし、このことが時に子供たちの精神に与える恐怖のことを言っているのでもない。健康な時に精神の活力と堅固さが極めて大きいことを公言する人々の中にすら、病気に伴う心の弱さや意気消沈はしばしば存在し、それはどのような人であれ他人の視線を非常に苦痛に感じさせる。そのような精神状態では、医師の訪問は、それが望まれたものであっても、特別におそれられることがよくある。その訪問が自ずと危険に対する不安を目覚めさせるからである。こういった不安は、形式的で堅苦しい服装や重苦しい振る舞いが消散させると間違って解釈されているのである。まさしく、気さくで明るく心落ち着かせる振る舞いに適切な時があるとすれば、それはこのような場合にちがいない。そのような場合には友人の中の医師を忘れることがそれほど必要なのである。

それどころか、医師の作法の一般的な特徴がいかなる点においても特異でな

ければならないという理由が私には分からない。そういった作法は卑屈さのない愛想の良さ、形式張った堅苦しさのない莊重さ、軽率さのない陽気さでありうる。それらは彼の置かれている状況に応じて当然変化するであろう。患者とともに彼の健康と気分の回復を喜ぶ医師の様子と、患者の友人たちに彼の近く死の説明を行う医師の様子とがどれほど異なるものであることか。しかしながら、ある国のしきたりが、医師に彼の周りのあらゆる対象によっても動かされず、かつ同様に喜びや悲しみにも影響されないような、変わることをない同じ外観と重々しさとを守るように要求しているのであれば、彼はそれに服さざるを得ない。しかし、そのような必要性がないのに、彼が自ら進んで自らをこういった拘束もしくは他の何らかの拘束下に置き、偽りの特質を身につけるのであれば、彼の心もしくは理解力の質を疑うのも理由のあることである。

〔作法 (manners) について〕

医師は、いかなる程度であろうとも彼をあざけりの対象としうる僅かな特異さも彼の作法の中にこっそりと忍び込むことを注意深く避けるべきである。特に若い医師たちは、自分たちがそのような特異さを恣にして、彼らの先輩が時にそうであると同じ免責を得られると想像しているとすれば、非常な思い違いをしていることになるだろう。実際は〔人生の〕観察の教えるところは、そしてそれはおそらく人類に大きな名誉を与えるものではまったくないが、ある医師の自らの職能において学があるという評判がいったん完全に確立されてしまうと、ほとんどすべての作法における特異さは、そして他の人の場合には不快なものになるようなものですらもが、彼の想定上の優れた価値によって想像力に課せられる印象を深めるのであり、彼の人気と名声を増大させるということなのである。

〔潔癖さに対する愛着〕

医師が医療行為においてどうしても避けることのできない不愉快な状況に対して、彼に嫌悪を催させがちになるある種の過度の潔癖さに身をゆだねてしまうことには、大きな不都合がある。真の潔癖さとは、精神の一つの徳であり、それは清潔さや小ざっぱりした感じの良さに対する愛着として、またそれが与えられるうところでは上品さに対する愛着としてすら現れるが、人間愛からの義務あるいは利益が要求するところでは、それはつねに場所を譲り、自分のことは度外視するのである。患者の救済に貢献しう思いやりのある行為や義務をなんであれ彼の威厳よりも下にあると考えるのは、医師においては誤りである。必要があるときに、彼がもし彼の能力の及ぶ限りにおいて外科医や薬剤師や看護婦にすらならないのであれば、彼は相応しくない行為をしていることになる。しかしながら、そのような必要がないのに、もし彼が他人の領域を侵すのであれば、まさしく自らの品位を落としていることになる。それは、彼が医師の威厳に相応しくない行為をしているからではなく、教養ある紳士としての特性に相応しくない仕方で行為しているからである。

患者になされる往診は、患者の訴えの緊急性と危険度に釣り合っていないければならない。医師とはこのようなことの最良の判定者であるから、彼はそれに応じて彼の訪問を調整すべきである。しかし、必要な度重なる訪問が患者にさらなる出費をもたらさないようにするには、ある種の細やかな配慮がしばしば求められる。患者には、医師が彼といる間は、医師のすべての注意を求める権利がある。医師は他にどんな用事もしくは仕事を持っていたとしても、その時間をすべて患者に捧げなければならない。私たちの職業において常に忙しい状態にあるように見える人たちがいるが、そういう忙しさは、たんに性癖にすぎない場合もあるが、他の要因による場合もよくある。時間の儉約や、用事を適切に調整することの欠如によって絶えず苦しい状態に陥っている人たちもいれば、旺

盛な想像力や精神の弱まることのない活動によって、処理できないほど多数の仕事に巻き込まれている人たちもいる。しかし、それが生じる原因が何であれ、それは早く矯正されるべきであり、習慣にまで発展することを黙認すべきではない。それは病者に対する医師の義務の遂行を妨げると同時に、病者たちの彼に対する信頼をも弱める。

[追従について]

さてここまで私たち同業者のある人たちの行いにおいて私が間違っていると考えることに関して私の見解を自由に述べてきたが、それと同じように自由に、医師だけでなく他の学識者の行動に珍しくない特別の事情について批評しよう。それは私たちの職業の威厳にとって基本的に有害であると私には思われるものである。私が言わんとしているのは、他の点では学識と創意において優れた人々の名をさわめてしばしば汚すあの、位ある人や富を持つ人に対する振る舞いにおける追従である。高い位に伴う外見の立派さや輝きは、ときに彼らの判断力を幻惑しがちであり、肩書や財産の見かけ上の栄誉に彼らをしてあまりに多大な敬意を払わせるのである。彼らの哲学が、彼らをしてそれを軽蔑するように仕向けるべきなのである。

[秘薬についての見解]

医師が秘薬 (secrets) すなわち自家調整薬 (nostrums) を保持していることに関して、私たちの職業で大きな論争があった。このような行為の擁護としてもっともらしく言われたことは、大部分の人々は、自らの能力と等しいものに関心を向けることは少ない、あるいは、高く評価することは少ないということであり、また、彼らは彼らに何の代償も求めないものを低く評価する傾向があるということである。経験の示すところは、人々は何であれ神秘や秘密めいたものに自然と引き付けられるということである。偽薬の売り手は、その並外

れた効能 (virtues) について、その問題になんら関心のない多くの人々がする以上の嘘をついているわけではない。思慮分別を持ち廉直な人々ですら同じである。新奇で信じがたいものに対する愛着は、多かれ少なかれ想像力に影響する。興奮させられる程度に応じて、理解力は混乱させられる。秘薬はその秘密がひとたび暴露されると、直ちにその驚くべき性質は消滅し、2、3か月のうちにそれは通例忘れられる。もしそれが実際に有益なものであれば、医師たちはたぶんそれを採用するであろうが、しかしそれは決して以前の評判を取り戻すことはない。またさらにこれこそが、良い薬が治療に導入されうるただ一つの道であるとも言われる。大部分の人々は、普通の一般的な治療薬を処方する正規の医師の指示よりも、謎めいた手段によって彼らを治療すると公言する人の指示により容易に従おうとするのだから。さらに根拠もなく主張されていることは、最良の薬のいくつかのものは、正規の医師たちには反対されたにもかかわらず、もともと秘薬として導入されたものであると。しかし、こういったことが本当だと認めるとしても、自家調整薬は全体として善以上に害をもたらすこと、それらは人々をして既知の承認されているものを無視させ、未知のおそらくは決して暴露されることのないものを追い求めさせることによって、私たちの技術の進歩を妨げること、そしてさらに、そういう薬は一般に、それらを無差別に処方する下層の無学な人々によって調剤されているから、それらは私たちの国 [すなわち、スコットランドやイングランド] では公共の厄介者 (public nuisance) になっていると私は確信している。しかしながら、大陸のいくつかの場所では、名誉と信望のある医師たちが自家調整薬を保持している。そのような所有状態では、私たちがここで経験していると同じ乱用は冒されないであろうが、それでもなお、そのような行為は、打算的で狭量に見える。

患者あるいは患者の友人たちの、彼のために処方された薬の本性を知ろうとする好奇心は自然なもので、したがって、非難することは出来ない。しかしこ

れは、叶えることがしばしば非常に不適当となる好奇心である。人類には曖昧さの覆いで隠されているものを高く評価し、何であれ彼らにとって明々白々であるものを過少評価するという自然本性的な性向が存在する。ある薬の効果に対する堅固とした信頼は、理解力に刻印される合理的な説得力よりはむしろ想像力に依存する。そして想像力というものは、明瞭に知覚されているいかなる対象によっても、また、常識にとって明々白々ないかなる真理によっても決して活気づけられることはない。パンとミルクによる湿布剤（poultice）が多くの場合、彼らにとって馴染みのない名前を持つ半ダースの含有材料からなる湿布剤と同じ効果があるということを納得することのできる人はほとんどいない。あるいは、一杯のワインが、強心剤が必要とされている大抵の場合に投与されうる最良のものであるということを納得することのできる人はほとんどいない。既知のありふれた療法に対する信頼のこうした欠如は、必然的に、医師の低い評価を引き起こすのと同様に、処方に対する軽視の原因とならざるを得ない。さらに、患者が自分のために指示されるあらゆる薬の本性に通じている場合には、医師は、薬に無知な患者が持つ得心へと転換することのできない多くのたわいもない異議によって彼の処置を妨げられる。この結果は、医師を困惑させ、彼をして治療行為において、とりわけより強力な療法の適用において優柔不断にすることもあるだろう。さらに考慮されるべきは、医師のケアのもとで患者が死ぬ、もしくはより病状が悪化するようなとき、彼の友人たちはしばしば、彼らがそれについて知らされている場合には、なされたことのすべての跡をたどってひどく苦しみ、このようにして、全く不当ではあるけれども、その病気の不可避免的な帰結であったにもかかわらずそのことで医師を非難するように導かれることもあるということである。むろん、採用するように提案されている治療法の本性を患者に知ってもらうことが適切であるような場合もある。それは、ある種の患者においてある種の薬の質と量の両方に関して、大きな配慮を必要とする体質上の特異性が存在する場合である。医師はそのような

薬を処方する前にそのような特異性について知らされていなければならない。

[医師に対する無信仰であるとの非難について考える]

私はこの講義を、私たちの職能に対してしばしば強く主張されてきた忌むべき本性に関するいくつかの所見を以て終わることにする。私が言わんとしているのは、無信仰 (infidelity) と宗教に対する軽蔑のことである。私はそのような非難は根拠が希薄だと考えているし、私たちの仲間の中でもっとも卓越した人々は、真の敬虔さにおいて際立っていたと敢えて言いたい。私は例えばハーベイ (Harvey)、シデナム、アーバスノット (Arbuthnot)、プールハーベ、シュタール (Stahl)、そしてホフマン (Hoffman) の名だけを挙げておくことにする。⁵ しかしながら、このような誹謗中傷がどこから生じているのかを見るのは容易である。知識によって増大された精神を持ち、あらゆる主題について極めて自由に考え、推論する人たちは、特定の宗派もしくは学説の頑迷な信仰者にはなりにくい。彼らは自ら自身の原則に対しておれることがなく、自らと見解の異なる人たちを悪く思わないが、しかし、彼らは彼らの良心の主人であるかのような態度を取り、彼らに対して彼らが何を信じるべきかを指図しようとする人たちの権威と統制には我慢できない。このような心の自由、異なった見解を持つ人たちに対するこのような温和さや寛容さは、偏狭な精神を持った人々によって、たびたび隠された無信仰、懐疑主義、あるいは、少なくとも宗教における無関心のせいにされた。他方で、誠実なキリスト教徒であった幾人かの人々は、そのような非難に憤慨し、ときに自らの見解を隠すことなく述べ、そのことの故に、彼らの敵に彼らを誹謗中傷する口実を与えることにもなった。これが医師に対してあれほどしばしば、あれほど不正になされた無信仰という非難の本当の源泉であったと私は想像する。宗教について自由に考え、あるいは、論じることに慣れている人がほとんどいない隣の国 [フランスのこと] で、また、最近に至るまで、この主題に関して敢えて誰も自由に自らの見解を

表明しようとしなかった隣の国で、幾人かの頭脳明晰で鋭敏な人々が、ここ2、3年の間に出現し、自らの新しく獲得した自由を示すことを切望して、それが啓示宗教であろうが自然宗教であろうが、すべての宗教の根底を揺り動かそうと試みている。最近になって最も低級な迷信から解放されたこともあって、不自然でなくもない転換によって一気に彼らは無信論に突入してしまったのである。おそらく幸いなのは、これらの紳士たちがこれまで事柄を主導してきたことである。なぜなら、このような不幸はすぐに治癒するだろうと期待されうるからである。人類はさまざまな迷信によって歪められた宗教的見解をもっているかもしれないが、それでも依然として宗教は人間の精神にとって自然なことであり、それを根絶しようとするいかなる試みも、それが不正なことであると同様、無力であるということも見出されるであろう。しかし、無神論が魂の不死の不信仰とともに一般的に普及したとしても、そのような心情の持続は必然的に非常に短いものになるだろう。なぜならそういった心情はすぐさま社会のあらゆる紐帯を分断し、無秩序と不正の不断の状況を作り出すだろう。そういった心情を長く隠蔽してきた、あの粗野な形而上学的衣装や2、3の隠遁者の陰鬱な思弁を剥ぎ取れば、それらの心情は今や、多くの人々の間でウィットとヒューモアと見なされているもので飾られ、あらゆる可能性に適合された世界に提示されることになる。それらの心情が何らかの論拠を含んでいる限りで、そういった心情の弱点はしばしば論証されてきた。不信仰の現今の支持者たちが、自らの見解を広めるために採っている方法は少し危険である。彼らは自信満々の態度で、自然宗教であれ啓示宗教であれ、そういった信仰を明言している人たちは、偽善者かもしくは馬鹿ものだという考えを仄めかしている。これは若者たちの弱点を突いている。自由な精神を持つ若者は、当然なことながら偽善という考えを軽蔑し、間違った自尊心から、何であれ彼をそのように卑しい汚名にさらさせるようなものを恐れる。さらに虚栄心こそ彼らのもっとも支配的な情熱であり、彼らは一般にあらゆるものにまして軽蔑を恐れ、彼ら

の信条もしくは品行に対するいかなる非難よりも自らの理解力の弱さや狭さについて考えることを不快に思うほどである。しかし敢えて言えば、もっとも广大で、透徹し、しかもしっかりした理解力を持ち、偉大な精神と威厳と礼節を持って行動してきた、そして、社会のもっとも有用で友好的な一員と見なされてきた人たちは、決してあからさまに宗教の原理を侮辱しなかったし、陰険な仕方ではからかおうとしなかった。そうではなく逆に、そういう人たちは宗教の原理の最良の、もっとも思いやりのある友であった。医学の研究はとりわけ不信心へ導くと疑われることが最も少なくてはならない。「自然」の諸々の作品についての深い知識は、精神を「至高の存在」に関するもっとも崇高な諸概念へと高めると同時に、心を「摂理」に関するもっとも喜ばしい見解で大きく満たす。人間の能力にこれほど不釣り合いな主題へのすべての深い探求に必然的に伴う困難が、彼の医療行為において、彼の感覚の吟味にさらされる主題においてすらしばしば困惑させられる医師を圧倒するのだと疑わせてはならない。

さらに医師という職業には、必然的に彼をして物事の現状を超えたところを見させ、彼の心を宗教の側に向かわせる特別の事情が存在する。彼はかつて朗らかで幸せだった人々が深い悲嘆に沈んでいるのを目にする機会を多く持つ。[そういう人々は] 苦痛に満ちた長引く死に向き合っているときもあれば、気も狂わんばかりになった精神の苦悩にもがき苦しんでいるときもある。想像しなくてはならないことは、そのような苦痛に満ちた場面は、人間らしい思いやりのすべての感情を失っていないいかなる心をも優しくし、極めて複雑な苦悩の中にある魂を唯一支えることのできるかの宗教を、さらにまた、命を、喜びを以て享受させ、尊厳を以て終わらせることを教えるかの宗教を、畏敬させるだろうということである。不幸にして死後の世界を信じることが出来ない医師であっても、彼がもし普通の善良な心をもっていれば、死に至る病気の感染から人々を保護しようとする場合と同じ配慮を以て、彼に委ねられた人々から彼

の感情を隠すであろう。思いやりのない心をもっているか、あるいはさまざまな仕事に囚われている心を持った人なら、彼自身の不幸な状態に気付かないかもしれない。しかし、今にも息を引き取ろうとしている人（nature）からその最後の支えを奪うことは、そしてまた現世でのあらゆる希望に最後の別れをした人々の最後に残された慰めを吹き飛ばしてしまうことは、野蛮なことである。しかし、人としての思いやりや社会の平和と幸福に対する敬意という動機すらもが、医師に宗教ないしは道徳に関する破壊的な見解を表明することを抑制させえないのであれば、その職業の礼儀正しさを強く促しても無駄である。私たちがそのような行為になしうるもっとも好意的な解釈は、そのような行為が、道徳や礼儀正しさや良きマナーのあらゆる紐帯を忘れさせる御し難い軽薄さからか、もしくは、罪深い虚栄心から生じていると想定することである。

私は、これほど重大な主題を取り扱うに際して、いささか道から逸れてしまったことを言い訳しようとは思わない。医師の義務と責務に関する探究では、私たちの職業にとってこれほども名声を損なう不名誉の種を払拭すると同時に、社会にとってもあなた方自身の利益や名誉にとっても同じように危険で、間違った行動原理という非難を引き起こしかねない、社交におけるあの傲慢で思いやりのない態度や虚栄心に対してあなた方に警告する試みが必要だと私には思われたのだ。

註

- 1 底本は、*The Works of the late John Gregory*, M. D. 4 Volumes (1788), Volume 3: *Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician* (1770)である。なお、注の作成には、Laurence B. McCullough 編の *John Gregory's Writings on Medical Ethics and Philosophy of Medicine* (Kluwer Academic Publishers, 1998) や、川喜田愛郎著『近代医学の史的基盤』上・下（岩波書店、1977）、ブリタニカなどの各種辞典・辞書を参考にした。
- 2 ここは訂正の指示に従い、底本の abilities を patience と読み替える。

- 3 Thomas Sydenham (1624-1689) は、英国の医師で、17世紀の医学の歴史におけるもっとも重要な人物の一人。Hermann Boerhaave (1668-1738) はオランダの著名な医師で、ライデン大学の医学教授となり、医学者、教育者として多大な影響力をもった。ジョン・グレゴリーは同大学に留学した。
- 4 Cornelius Celsus は紀元後一世紀のローマの著述家で *De Medicina* という著述が残されている。Fabricius Hildanus (1560-1624) は、ドイツの外科医、Marcus Aurelius Severinus (1580-1656) はイタリア、ナポリの解剖学教授で、優れた外科医でもあった。Bartholin(原文では Bartholine、ラテン名は Bartholinus) は、Thomas Bartholin (1616-1680) のことと思われる。彼は、デンマークの解剖学者で、リンパ管の発見者の一人。
- 5 William Harvey (1578-1657) は血液循環の発見で著名な医師、生理学者。John Arbuthnot (1667-1735) は英国の医師、文人。Georg Ernst Stahl (1660-1734) は、ドイツの化学者、医師で、ハレ大学の教授、後プロシヤ王の侍医。Friedrich Hoffman (1660-1742) は、ドイツの医学者で、ハレ大学の教授。医療倫理学の重要な論考 *Medicus Politicus* (1749) を著した。